

道元禪師の仏性観

——仏性の巻・竜樹の章を中心として——

東 郁 雄

一 序 文

この論文の主目標は道元禪師が仁治二年辛丑十月十四日に
雍州観音導利興聖宝林寺において示衆された正法眼蔵仏性の
巻（永本には仁治三年示衆）の中の「竜樹変相の章」を参究す
ることにある。

仁治二年（一二四一）は道元禪師が四十二歳の時のことであ
る。

参考までに、仁治二年には仏祖の巻、嗣書、法華転法華、
心不可得、古鏡、看經、仏性、行仏威儀、仏教、神通の巻が、
示衆、記となっている。かなり精力的に活躍された時期であ
る。

ここでは、始に仏性を教学上の立場から、自性清浄心、如
来蔵、仏性の流れを、馬祖語録を横において、楞伽經、勝鬘
經、如来蔵經、涅槃經、大乘起信論などを通して検討した。

次に、道元禪師自らの仏性観を眼蔵の仏性の巻を中心に、
弁道話、栢樹子の巻などを参考にしてみてきた。

そのねらいは、有仏性と無仏性の根底にある、悉有仏性、
「悉有は仏性なり」と、無常仏性や、「欲_レ知_ニ仏性義_一、当_レ観_ニ
時節因縁_一」（涅槃經）などの動的な流れを検討することにある。
更に、「定慧等学明見仏性」と云う、南泉と黄檗の問答を
みて、竜樹の「身現円月相」、「身現仏性」を坐禅の立場から
参究した。

「身現円月相」は竜樹の変相と提婆の拈提とを第一の問題
とし、次に、道元禪師が「竜樹変相の図」について嘉定十六
年（一二三三）と宝慶元年（一二三四）の阿育王山広利禪寺での
体験をのべた。

更に「竜樹変相」の章を各異本の奥書を比べながら文献的
な立場から検討した。

結論として、修証不二の立場から「身現円月相」を行とし

てみていったつもりである。

二 如来蔵と仏性——教學の立場——

景德伝灯録⁽¹⁾卷六によると、馬祖道一禪師について、

江西道一禪師漢州什那人也。姓馬氏、……一日謂衆曰、汝等諸人各信_二自心是仏_一。此心即是仏心。達磨大師從_二南天竺國_一來。躬至_二中華_一。伝_二上乘一心之法_一。令_二汝等開悟_一。又引_二楞伽經文_一。以_レ印_二衆生心地_一。恐_二汝顛倒不_二自信_一。此心之法各々有_レ之。故楞伽經云、仏語心為_レ宗。無門為_二法門_一。又云、夫求_レ法者必_レ無_レ所_レ求。心外無_二別仏_一。仏外無_二別心_一……

とある。

ここで注意したい所は、「汝等諸人各信_二自心是仏_一。」と云ひ、「此心即是仏心」と云い、自心とは此心であり、自らの心が仏であり、仏心であると云っていることである。

又、楞伽經の句を引いて、「心外無_二別仏_一、仏外無_二別心_一」と述べている。

これは、馬祖の有名な、「即心即仏」であり、進んでは、「非心非仏」である。心にあらざれば仏にあらずである。

道元禪師の正法眼蔵には「即心是仏」の巻がある。その中に、「……癡人おもはくは、衆生の廬知念覺の未発菩提心なるを、すなはち仏とすとおもへり」とある。

また、「いはゆる正伝しきたれる心といふは、一心一切法、

一切法一心なり」ともある。それは、「あきらかにしりぬ、心とは、山河大地なり、日月星辰なり」と云うことである。「かくのごとくなるがゆゑに、即心是仏、不染汗即心是仏なり」。

従つて、不染汗と云うことが、即心是仏である。「しかあればすなはち、即心是仏とは発心・修行・菩提・涅槃の諸仏なり」とあり、つづけて、「いまだ発心・修行・菩提・涅槃せざるは、即心是仏にあらず」とある。発菩提心し、修行しない即心是仏というのはない、と道元禪師は云われる。仏性もそのようなものとして促えられていくのである。

もとにもどつて、馬祖の語を追及すると、馬祖語録⁽²⁾十の示衆には、

在纏名_二如来蔵_一、出纏名_二浄法身_一。法身無窮、体無_二増減_一、能大能小、能方能円、応_レ物現_レ形、如_二水中月_一。滔滔運用、不_レ立_二根栽_一とある。

如来蔵と云うのは煩惱につつまれたものであり、法身は煩惱から離れたものである。それを「在纏名_二如来蔵_一、出纏名_二浄法身_一。」と云うのである。

この如来蔵という語は、楞伽經⁽³⁾の中に、

……世尊修多羅説_二如来蔵自性清浄_一。転_二三十二相_一。入_二於一切衆生身中_一。如_二大価宝垢衣所_一纏。如来之蔵常住不変。亦復如_レ是。

如来蔵とか、自性清浄は、一切衆生の身中にある。それは

大いなる価値のある宝が、よごれた衣の中につつまれているようなものである。そして、垢衣の中にある如来蔵は常住であり、不変であると説く。

馬祖はこの楞伽經をその語録の中で引用しているのである。馬祖の仏性觀を更に敷衍しているのが黄檗の伝心法要である。更にこの如来蔵の語は勝鬘經(4)の法身章第八に、

如_レ是如来法身不_レ離_二煩惱蔵_一名_二如来蔵_一。

とある。如来蔵は煩惱を離れていないのである。大乘起信論ではこれを「真妄和合」というのである。起信論のことは後述するが宝性論の巻第四の中には、自性清淨とか如来蔵の語が多く現われている。即ち、

……依_二真如_一無_二差別_一。不_レ離_二仏法身_一故。説_二諸衆生皆有_二如来蔵_一。以_二自性清淨_一、心雖_レ言_二清淨_一、而本来無_二法故_一。……

とあり、この中にも

諸衆生皆有_二如来蔵_一。

とある。衆生に如来蔵がある、ということとは、

……知_二諸衆生有_二清淨身_一。文殊師利。所謂、如来自性清淨身。乃至一切衆生自性清淨身。此二法者。無_二無別_一。

と説くのである。一切衆生自性清淨身とは、換言すれば、生仏不二、悉有仏性、のことである。

宝性論(5)巻第四では次のような偈を述べている。即ち、

一切諸衆生 平等如来蔵

道元禪師の仏性觀(東)

真如清淨法 名_二如来体_一
依_レ是義_一故 説_二一切衆生_一
皆有_二如来蔵_一 应当_レ如_レ是知_一。

ここでは、一切諸衆生は平等如来蔵であると述べている。更に、

又復偈言

仏性有_二二種_一 一者若_二地藏_一
二者如_二樹果_一 無始_レ世界_レ来_一。

ここでは、如来蔵という言葉が仏性という言葉にかわってきている。

前述の勝鬘經の言葉をかりると、「如_レ是如来法身不_レ離_二煩惱蔵_一。名_二如来蔵_一」とあるから、如来蔵は煩惱を離れていない。

大乘起信論(6)には、

故説_二一切衆生本来常住入_二於涅槃_一。菩提之法非_二可_レ修相_一、非_二可_レ作相_一。

とあり、菩提の法は修行して手に入れるものでない、「自信_二己身有_二真如法_一、発心修行_{スル}。」すなわち、自己がそのまま真如法(仏性)であると信じて、発心修行するのである。

また、同じく、起信論の中には、「一切衆生悉有_二真如_一」と云っている。涅槃經の「一切衆生悉有_二仏性_一」と同じである。道元禪師は「一切は衆生であり、悉有は仏性である」と読んでいる。

坐禪をしていると妄念がしきりに起きて来て絶える間がない。起信論ではそのことを、「依_テ一切衆生以_レ有_ニ妄心_一一念分別上。皆不_ニ相應_一故。説為_レ空」。即ち、妄心からの念念分別は相應しない、正しくない。故に、この妄心も、それから派生する念念分別は本来のものでなく、空であると説くのである。

般若心経の「色即是空、空即是色」のあとにつゞく、「受想行識、亦復如是」が、念々分別は空であると云うことである。受想行識が念念分別である。

従って、もし、妄心がなければ空すべきものはないのである。このことを起信論では、

若離_ニ妄心_一、実無_レ可_レ空故。所謂不空者。^{ナルモカ}

と云い、その不空は、生滅心と不生不滅が和合して、非一非異である。即ち、生滅心（妄念）と不生不滅（仏性）は同一でもなく、全く別のものでもないと云う。これが真妄和合識としての阿梨耶識である。

生滅門と真如門（還滅門）があり、生死輪廻の方向と解脱の方向へと分れるのである。

別の面から、このことを覚と不覚とにわけける。覚とは、「法界一相即是如来平等法身。依_ニ此法身_一説名_ニ本覚_一。」と云う。この本覚は始覚と同じであると説く、即ち、「本覚義者。対_ニ始覚義_一説。以_ニ始覚者即同_ニ本覚_一。……」となり、始覚と

本覚、本覚と不覚の関係を述べていくのである。起信論では法身を本覚と称し、妄心は空すべきであり、もし妄心を離れたら不空であり、それは法身であると云うのである。

梵網経では、仏戒とか、菩薩戒とか、仏性戒とか云い、仏性が戒の本源であり、これを金剛宝戒とも云っている。梵網経の下巻に、「金剛宝戒、是一切仏本源、一切菩薩本源、仏性種子、一切衆生皆有_ニ仏性_一、一切意識色心、是情是心、皆入_ニ仏性戒中_一。」と云っている。ここにも「一切衆生皆有仏性」とあり、涅槃経の「一切衆生悉有仏性」と全く軌を一にしている。

唯、道元禪師は、仏性を種子のようにみることを極力さけられたのであるが、その「仏性種子観」は如来蔵^{（？）}経の中に次のように記されている。即ち、

爾時世尊以_ニ偈頌_一曰、……

譬如 _ニ 菴羅果 _一	内実不 _ニ 毀壞 _一
種之於 _ニ 大地 _一	必成 _ニ 大樹王 _一
如来無漏眼	觀 _ニ 一切衆生 _一
身内如来蔵	如 _ニ 花果中実 _一
無明覆 _ニ 仏蔵 _一	汝等応 _レ 信 _レ 知
三昧智具足	一切無 _ニ 能壞 _一
是故我説 _レ 法	開 _ニ 彼如来蔵 _一
疾成 _ニ 無上道 _一	如 _レ 果成 _ニ 樹王 _一

ここでは如来蔵は果物のなかの種子か、花果の中の実のよ
うに観られている。このことは道元禪師が、「正法眼蔵仏性の
卷」の中で、「ある一類おもはく、仏性は艸木の種子のごとし。
法雨のうるほひ、しきりにうるほすとき、芽莖生長し、枝葉
華果もすことあり、果実さらに種子をはらめり。かくのごと
く見解する、凡夫の情景なり」といわれて、強く種子説を否
定されている。

道元禪師は、「悉有は仏性なり」が基本であり、「尽界には
すべて客塵なし」である。「悉有仏性」は涅槃經にある言葉
であるが、その第二十七師子吼品(8)の中で、

仏性者名第一義空。第一義空名為智慧。所謂空者。不見空
与三空。乃至仏性即是一切諸仏阿耨多羅三藐三菩提中道種子。
とあり、仏性は第一義空であると説く。

空と仏性について、道元禪師は次の如く説くのである。

正法眼蔵仏性の卷で、五祖弘忍と四祖道信との問答をあげ、
祖曰、是何姓。師答曰、是仏性。祖曰、汝無三仏性。師答曰、仏
性空故、所以言無。祖識其法器、使為三侍者。

道元禪師はこのあとにつづけて、

いはゆるの空は、色即是空の空にあらず、色即是空といふは、色
を強為して空とするにあらず、空をわかちて色を作家せるにあら
ず、空是空の空なるべし。空是空の空といふは、空裏一片石なり。
しかあればすなはち仏性無と仏性空と、仏性有と、四祖五祖、聞
取道取

とある。

二 道元禪師の仏性観——仏性の卷——

正法眼蔵仏性の卷は次のように分段することができる。

- 一段 悉有仏性（涅槃經）
- 二段 時節因縁（涅槃經）
- 三段 皆依建立（馬鳴仏性海）
- 四段 無仏性（仏性空と四祖五祖）
- 五段 嶺南人無仏性（成仏と同参）
- 六段 無常仏性（六祖）
- 七段 身現仏性（竜樹変相）
- 八段 悉有仏性（齊安国師）
- 九段 無仏性（滙山）
- 十段 使得無礙風（百丈・去住自由）
- 十一段 定慧等学明見仏性（南泉・黄檗）
- 十二段 趙州仏性無
- 十三段 趙州仏性有
- 十四段 蚯蚓斬為二兩段（長沙・竺尚書）

道元禪師は大般涅槃經第二十七の中にある「一切衆生悉有
仏性、如来常住無有变易」の句の中の「悉有仏性」をうけて、
「悉有は仏性なり」と読み、存在するものは凡て仏性である、
と云われるのである。

当然の帰結として、「尽界はすべて客塵なし、直下さらに

第二人にあらず」となるのである。客塵は客塵煩惱とつづく語句であり、世の中に存在するものの中には、無駄なもの、不必要なものはないと云うのである。仏性の巻の中では、馬鳴尊者の仏性海を説いた次の句をあげている。即ち、

山河大地 皆依建立

三昧六通 由茲発現

……恁麼ならば山河をみるは仏性をみるなり、仏性をみるは驢腮馬嘴をみるなり。

山河という自然環境も仏性であるという。

更に、道元禪師は、齊安国師（馬祖の門下）の示衆、「一切衆生有仏性」を拈提されて、

……有心者みな衆生なり、心是衆生なるがゆゑに。無心者おなじく衆生なるべし、衆生是心なるがゆゑに。……草木国土これ心なり、……日月星辰これ心なり、心なるがゆゑに衆生なり、衆生なるがゆゑに有仏性なり。

現実の存在はすべて仏性である。存在する一切を肯定する。諸法実相と云うのは、諸法すなわち一切の存在はそのまま実相であるという。現成公案も現実になっているそのままが真理であるというのである。公案と云うのは、「禪門では、仏祖が開示した仏法の道理そのものを意味し、……」（大修館、新版禅学大辞典・三〇三頁）とある。正法眼蔵の現成公案の巻には、

水をきはめ、そらをきはめてのち、水そらをゆかんと擬する鳥魚

あらんは、水にも、そらにも、みちをうべからず、ところをうべからず、このところをうれば、この行李したがひて現成公案す。このみちをうれば、この行李したがひて現成公案するなり。とある。

道元禪師は中国（南宋）に渡る以前、叡山の仏教の研修をつづけた。当時、日本仏教の流れは、高野山を中心とした真言密教と、叡山の天台宗学、特に中古天台の本覚論の中枢をなす法華経にあつたと思われる。

栄華物語の中心人物、藤原道長は、「摩訶止観・法華玄義・法華文句」を究めたと云われるし、平安貴族の中でも法華経の聴教聞法は非常な関心をもたれていたようである。

道元禪師の正法眼蔵の中にも、「法華転法華」・「諸法実相」・「唯仏与仏」などは法華経に関するものである。

日本仏教は戒壇と仏性論（本覚思想）で転回している面もあるように考えられる。

道元禪師の正法眼蔵仏性の巻は中国禅の流れが中心であるように見えるが日本仏教の影響が全くないとは考えられない。「正法眼蔵諸法実相の巻」には、「……参学は一等なるがゆゑに、唯仏与仏は諸法実相なり、諸法実相は唯仏与仏なり。……」とある。

悉有仏性は諸法実相であり、諸法実相は唯仏与仏である。唯、現実を肯定すると云うだけでは真実の仏性の把握には

ならない。

道元禪師は仏性を更に追求するのである。

有仏性から無仏性へ移るのである。即ち、「仏性の巻」の中、「大瀧山大円禪師、あるとき衆にしめしていはく、一切衆生無仏性」。この示衆に対して、道元禪師は、

……一切衆生なにしてか仏性ならん、仏性あらん。もし仏性あるはこれ魔党なるべし。魔子一枚を将来して一切衆生にかさねんとす。仏性これ仏性なれば、衆生これ衆生なり。

と云い、衆生は衆生として完全である。衆生の上に仏性をかさねることは魔党であるというのである。これを、

衆生もとより仏性を具せんともとむとも、仏性はじめてきたるべきにあらざる宗旨なり。

と説明されている。

衆生は衆生で完全である、別に仏性を求める必要はないのである。今更、衆生に仏性を付加する必要はない。その意味で、一切衆生は無仏性である。この無仏性の道は、

……しかあればすなはち無仏性の道、はるかに四祖の祖室よりきこゆるものなり。黄梅に見聞し、趙州に流通し、大瀧に挙揚す。無仏性の道、かならず精進すべし。

とある。

有仏性も無仏性も本質的には同じなのである。五祖と六祖の問答の「嶺南人無仏性」も、道元禪師によれば、

……しかあれば無仏性の正当恁麼時、すなはち作仏なり。無仏性

いまだ見聞せず、道取せざるは、いまだ作仏せざるなり。

「無仏性の正当恁麼時、すなはち作仏なり」というのは、無仏性即作仏である。

無仏性と仏性空についての四祖と五祖との問答と道元禪師の拈提は前述の通りである。

そこでは、色即是空よりも、「空是空の空なるべし」とい、「空裏一片石なり」というのである。所謂空の一方究尽である。さらに、「しかあればすなはち仏性無と仏性空と仏性有と、四祖五祖、聞取道取」とある。仏性空の空は色即是空の空でなく、空是空であると云うのは、摩訶般若波羅密多の巻の中にも、「……いはく、色即是空なり、空即是色なり。色是色なり、空是空なり。百草なり、万象なり」とある。

「……諸法は空相なり……」と結んでいる。

仏性無も仏性有も仏性空である。仏性有と仏性無について、趙州の有名な、「狗子還有_二仏性_一也無」の古則がある。道元禪師はこのことについて、「……狗子とはいぬなり。かれに仏性あるべしと問取せず」とあるから、狗子と仏性のことではなく、「これは鉄漢また学道するかと問取するなり」が問題である。趙州の無を道元禪師は如何に考えているか、「……趙州いはく、無。この道をききて習学すべき方路あり。仏性の自称する無も恁麼道なるべし、狗子の自称する無も恁麼道なるべし、傍觀者の喚作の無も恁麼道なるべし。……いはく

る宗旨は、一切衆生無ならば、仏祖も無なるべし、狗子も無なるべし」。

趙州の無については、学道用心集第八「禪僧行履の事」の来に、

……趙州僧問。狗子還有ニ仏性一也無。州云無。於ニ無字上ニ擬量得麼。擁滞得麼。全無ニ巴鼻。請試撒^セ手。且撒^セ手看。身心如何。行李如何。生死如何。仏法如何。世法如何。山河大地。人畜家屋。畢竟如何。自然動靜二相。了然不生。此不生時。不ニ是頑然。無ニ人証^レ之。迷^レ之惟多。參禪人。且半途始得。全途莫^レ辞。祈禱祈禱。

趙州の無字は禪僧行履の要^{カナメ}でもあるのである。趙州は同じ、「狗子還有ニ仏性一也無。」の問に対して、「有」とも答えている。道元禪師はこの「有」に対して、「……すすみて仏有を学すべし。仏有は趙州有なり、趙州有は狗子有なり、狗子有は仏性有なり。……」すべてを肯定するのである。

次に、無常仏性について考えてみる。今までの所では、悉有仏性は、有仏性、無仏性へと展開する。通常、仏性は不生不滅であり、法身常住といわれるが、道元禪師は、無常仏性をとりあげられる。即ち、「仏性の卷」で、「六祖示ニ門人行昌云、無常者即仏性也、有常者即善惡一切諸法分別心也」。

道元禪師は、無常仏性を「しかあれば草木叢林の無常なる、すなはち仏性なり。人物身心の無常なる、これ仏性なり、国

土山河の無常なる、これ仏性なるによりてなり」と云われている。

無常とは変化であり、動的なものである。絶えざる「仏向上」である。仏とは向上である。「仏性の卷」では更につづけて、「阿耨多羅三藐三菩提（無上正等覺）、これ仏性なるがゆゑに無常なり」と云い、「大般涅槃、これ無常なるがゆゑに仏性なり」と云われている。

この無常仏性の上に、悉有は仏性なりと云われ、有仏性、無仏性と展開していくのである。次に行としての仏性を考えていく。

四 竜樹変相の章——身現仏性——

竜樹変相（身現円月相）について、正法眼蔵仏性の卷においては、次の二つの問題を中心に展開している。

(一) 竜樹変相と提婆身現円月相

(二) 道元禪師の阿育王山における体験

最初の、「竜樹変相と提婆」については、先づ、

第十四祖竜樹尊者、梵云那迦闍刺樹那。唐云竜樹亦竜勝、亦云竜猛。西天竺国人也。至南天竺国。彼国之人、多信ニ福業。尊者為説ニ妙法。聞者互相謂曰、人有ニ福業ニ世間第一、徒言ニ仏性、誰能觀^レ之。

南天竺国では人々は幸福の追及が第一で、妙法とか、仏性のことに関しては無関心であった。現今の人も同じである。

尊者曰、汝欲見_レ仏性、先須_レ除_レ我慢。彼人曰、仏性大_{ナルカ}耶小_{ナルカ}耶、尊者曰、仏性非_レ大非_レ小

非_レ広非_レ狭、無_レ福無_レ報、不死不生。彼聞_ニ理勝_ニ、悉廻_ニ初心_ニ。

除我慢でなければ仏性を見ることはできない、極言すれば、除我慢が見仏性であり、更には、除我慢仏性と云うことになる。

その仏性は不生不死である。つづいて、

尊者復於_ニ座上_ニ現_ニ自在身_ニ、如_ニ満月輪_ニ。一切衆会唯聞_ニ法音_ニ、不_レ親_ニ師相_ニ。於_ニ彼衆中_ニ有_ニ長者_ニ、子迦那提婆、謂_ニ衆会_ニ曰、識_ニ此相_ニ否。衆会曰、而今我等目所_レ未_レ見、耳所_レ未_レ聞、心無_レ所_レ識、身無_レ所_レ住。

竜樹が坐禅すると、自在身を現じ、その形は満月のようになつた。これが、竜樹の変相である。唯、法音だけが聞こえるだけであつた。竜樹の弟子の迦那提婆が、集っている人々に話しかけたと云うのである。

提婆曰、此是尊者現_ニ仏性相_ニ以_レ示_ニ我等_ニ、何以_レ知_レ之。蓋以_ニ無相三昧_ニ形如_ニ満月_ニ、仏性之義廓然虚明。言訖輪相即隱、復居_ニ本座_ニ。而説_レ偈言、

身現_ニ円月相_ニ、以表_ニ諸仏体_ニ、
説法無_ニ其形_ニ、用弁非_ニ声色_ニ。

直箇の用弁、即ち、仏性の働きは感覚では促えられない。説法は無形であると云うのである。道元禅師は、独自の立場から、竜樹変相を拈提される。即ち、「汝欲見_ニ仏性_ニ、先須

除_ニ我慢_ニ」に対して、「その見これ除我慢なり」といわれている。また、「身現の儀は、いまのたれ人も坐せるがごとくありしなり」といわれて、身現円月相の身現は誰でもが坐禅しているのと同じであるという。それを竜樹にだけ限るのは誤りであるとして、「愚者おもはく、尊者かりに化身を現せるを円月相といふとおもふは、仏道を相承せざる党類の邪念なり」という。また「この身現というは……竜樹にあらず諸仏体なり」と明言されている。坐禅の姿は、「身現相は仏性なり」といわれる。「仏体は身現なり。身現なる仏体あり」と云い、「皮肉骨髓の正法眼蔵、かならず兀坐すべきなり」と云われている。

次に、道元禅師の阿育王山における体験は、

予雲遊のそのかみ、大宋国にいたる。嘉定十六年癸未秋（一二二二）のころ、はじめて阿育王山広利禅寺にいたる。西廊間に、西天東地三十三祖の変相を画せるをみる。このとき領覽なし。のちに宝慶元年乙酉（一二二四）夏安居のなかに、かさねていたるに、西蜀の成桂知客と廊下を行歩するついでに、予知客にとふ、這箇是什麼変相。知客いはく、竜樹身現円月相。かく道取する顔色に鼻孔なし、声裏に語句なし。予いはく、真箇一枚画餅相似。ときに知客大笑すといへども、笑裏無_レ刀、破_ニ画餅_ニ不_レ得なり。

これは道元禅師が二十四歳の時の中国での体験である。正法眼蔵画餅の巻には、「もし画は実にあらずといはば、万法みな実にあらず。万法みな実にあらずば、仏法も実にあらず。

仏法もし実なるには、画餅すなはち実なるべし」とあり、「……人法は画より現じ、仏祖は画より成ずるなり」とある。仏性は画より生ずるのであると云うことは、「しばらく這箇は画餅なることを参学すべし」というのである。

五 仏性の巻の中の竜樹の章について

各異本の奥書を検討して

仏性の巻の中で、竜樹の章は他の章と比較して、内容からも異っているように思われるが、その取り扱いが、各異本によって違っているようである。即ち、六十巻本の系統では竜樹は「可_レ加也」として省かれている。

六十巻本と云うのは、永平寺五世義雲禪師が、道元禪師の滅後七十七年、嘉暦四年己巳の夏（一二三九）、が永平寺に在任中に編輯されたもので、各巻の著語と品目頌とを付したものである。

その、六十巻本正法眼蔵（洞雲寺所蔵）の奥書には、

正法眼蔵第三仏性 奥書	
仁治二年	示衆 一二四一
弘長二年	書写也懷辨 一二六一
建治三年	書写之寛海 一二七七
嘉慶三年	奉写之宋吾 一三八九
永平九世「竜樹変相可加也」	

として、変樹変相、即ち、身現円月相の本文は省かれている。又、永平寺所蔵の嘉元本（一二〇四）に、

正法眼蔵第三仏性、筆写不審

「竜樹変相可加也」

として、竜樹変相の本文は省かれている。

竜樹変相の文は、何故、省かれなければならなかったのであろうか。

正法眼蔵仏性の巻、懷辨禪師御親筆本の奥書には、

正法眼蔵仏性第三

仁治二年辛丑十月十四日（一二四一）

記于観音導利興聖宝林寺

仁治四年癸卯正月十五日（一二四三）

書写之 懷辨

爾仁治二年辛丑十月十四日（一二四一）

在雍州観音導利興聖宝林寺示衆。

再治御本之奥書也

正嘉二年戊午四月廿五日以内御本交合了（一二五八）

道元禪師の法を伝承せられた高弟懷辨禪師が、道元禪師の「仁治二年」に記された「仏性の巻」をその二年後に書写されたのである。七十五巻本は、道元禪師の高弟詮慧和尚が、道元禪師の原本を謄写して所持せられたものを基礎として註解を加えられたものが、豊後国（大分県）、泉福寺影室に蔵されていたので、七十五帖本、福本、または影室本、経豪本とも

いわれている。この七十五帖本の順序は道元禪師が親しく編輯されたものであるといわれている。この七十五帖本と十二卷眼蔵は対であり、六十卷眼蔵と二十八卷眼蔵とも対である。

また、寛海書写の八十三卷本の奥書には、

建治三年夏安居日書写之 寛海 一二七七

には、「竜樹変相」を仏性の巻下、として別につけ加えられている。

竜樹変相・身現円月相の章は、仏性の巻の中では特別の意味をもつものである。

日本古典文学大系の「正法眼蔵・正法眼蔵随聞記」の一二二頁の頭註には次のように説明されている。即ち、「洞雲寺本は、竜樹変相可加、とあって本文が存しない。恐らくは時を異にして撰述されたものであらう」と書かれている。

六 結 論

仏性は教学の上では、自性清浄心、如来蔵の流れの上で促えられ、「在纏名如来蔵、出纏名浄法身。」が結論のようである。

道元禪師は「偏界に客塵なし」として、客塵煩惱を否定し、悉有仏性・無常仏性と同時に、行として、「修証不二」の立場から、仏性の巻にある、「嶺南人無仏性」の中では、「仏性は成仏よりさきに具足せるにあらず、成仏よりのちに具足す

るなり、仏性かならず成仏と同参するなり」とある。同じことは、「栢樹子の巻」にも述べられている。

仏性の巻では、特に、「竜樹変相・身現円相」として、坐禅という行を通して、仏性を促えようとしている。仏性は理念ではなくて本証妙修としての坐禅であり、行である。

註

- (1) 景德伝灯録卷六、馬祖道一章 大正五一・二四五～二四六
- (2) 馬祖の語録と禅文化研究所一四一頁
- (3) 楞伽経第十一「一切仏語心品之二」大正十六・四七九
- (4) 勝鬘経、法身章第八 大正十二・二一七
- (5) 宝性論卷第四 大正三一・八一三
- (6) 大乘起信論覚不覚・生滅因縁 大正三二・五七五
- (7) 如来蔵経 大正十六・四五八
- (8) 涅槃経卷第二十七 大正十二・三六五

参考書 正法眼蔵仏性の巻外

一六一〇仏性論四卷 大正三一・七八七

一五九六撰大乘論 大正三一・二七一